



横倉山自然の森博物館を覆うように架かった二重の虹

## “第二の虹”の架け橋

2004年10月10日、雨上がりの午後5時頃、博物館建物をすっぽり覆うように仁淀川上空の北東の空に、珍しく虹が2段にわたって架かった。虹がくっきりと架かっている場合、よくその外側にさらにもう一つの虹が架かることがあるようである。ただし、この場合、外側の虹は色の配列が内側のそれとは逆で、赤が内側(下側)になる。

そもそも、虹は大気中に浮かぶ無数の水滴が太陽の光を屈折・分光して起こる現象である。従って、雨上がりの後発生するケースが多いが、雨が降っていても太陽の光が当り始めたり雲の切れ目ができることで発生することがある。大気中にたくさん浮かんでいる水滴の一つ一つがちょうどプリズム(分光器)の役割を果たし、水滴を通った太陽光の波長の違う光(色)がそれぞれ異なった屈折の仕方でも反射し、“七色の帯”[赤・橙・黄・緑・青・藍・紫]となって円弧を描くことになる。虹は、太陽を背にして自分(観測者)の前方、つまり、太陽と反対側に必ず弧をつくり、自分の隣にいる人は、自分とは違った別の虹を見ていることになる。ちなみ

に、上空の飛行機から見ると、雨滴は丸いため虹は完全な円に見えるという。

虹には、「虫」ヘンが付いているが、これは「にじ」の曲がっている形が虫に似ているからとされている。つまり、古代人は「にじ」を虫の相連なる形と考えて「虹」と書いたものであろうと言われている。また、あたかも何者かが創造したように幾何学的な模様で現われたり消えたりするため、“魔力をもったもの”と信じる風習が多いようで、アメリカ南西部のナバホ・インディアン(Navaho Indian)は“精霊”と考えているという。

ともあれ、雨上がりの空に七色の神秘的な虹が現われると、何となくほっとし、何か良いことがおこりそうな気分になる。それは、その何ともいえない美しい色によるのか、それともその丸い形によるのだろうか。“丸い”とは「和」を意味し、平和の証であるのかもしれないし、“夢の架け橋”によって人々の交流・協調を表す兆しなのかもしれない。

## ナウマン博士による高知市のスケッチと“鏡岩”

安井 敏夫

前巻で、ドイツ人地質学者・E.ナウマン博士が四国に地質調査に訪れた際に描いた、高知県佐川盆地のスケッチを紹介したが、今回は、高知市のスケッチを紹介する。

ナウマン博士は、四国の地質調査のため、1883(明治16)年と1885(明治18)年の二度高知を訪れているが、一度目は途中足のケガのため駕籠



“日本地質学の祖”・E. ナウマン博士

(“椅子駕籠”) で徳島から吉野川を廻り、高知の南国市領石<sup>①</sup>に入った後佐川に向かっている。後にこの時の調査結果をまとめた論文中にしばしば“鏡岩”もしくは“鏡石”ということばが登場し、強い関心があったことが伺える。“鏡岩”とは、文字通り‘鏡のような岩’のことで、多くは断層運動に伴う摩擦によってできた表面が滑らかな光沢

のある平板のような面で、多くの場合、地質学という「鏡肌」(slickenside)のことを指し、地域の地殻変動や構造発達史を考える上で重要である。また、領石と高知市朝倉では、古墳の調査も行なっており、玄室、羨道の長さ・幅・高さと入口の方向等について簡単に記載している(遺物に関する記載はない)。古墳に使用されている石材については触れていないが、朝倉の古墳[宮ノ前古墳(現「朝倉古墳」)]に使用されている巨大な石材に自然の鏡面をもつものがあることに大変興味を示している。このことに関してナウマン博士は、「鏡は、日本古来の宗教である神道において古くからきわめて重要な役割をもっている。鏡のような岩に対しては、特に古代においては宗教的な観念と結びついていたのであろう」と推測している。実際、南国市岡豊町小蓮<sup>②</sup>にある高知県最大の古墳[円墳・横穴式石室]・「小蓮古墳」[6世紀後半]の玄室入口南約15mの所に、見事な鏡肌をも

つ“鏡岩”[約115×150<sup>③</sup>、チャート製]が存在し、それを御神体とする祠があり、「光岩様」の呼び名で古くから祭られている。

ナウマン博士が古墳に関心をもったのは、地質学者という立場からすれば、先ず、古墳自体に使用されている“大きな岩の塊”が何(どのような種類の岩石)であるのかという観点から目が注がれたのかもしれない。あるいは最初から、「ドルメン」<sup>④</sup>として観察したとも考えられるが、古墳を構成している岩石が一体どこからもたらされたものかを考察することは、考古学のみならず地質学的にも重要なことである。特にヨーロッパなどでは、よく水河によって遠くから運ばれてきた“迷子石”(漂石)と呼ばれる周囲の岩石とは異質的な巨礫～巨石が存在し、ナウマン博士もそのような感覚で観たのかもしれない。余談ではあるが、迷子石とは成因が異なるが、高知市一宮の土佐神社[土佐一の宮神社]境内のはずれに“礫石”[2×3×1.1m、珪質岩]とよばれる出所不明の周りの地質とは異質の大きな石がポツンと鎮座しており、言い伝えでは、ここからはるか50km西方の須崎市浦内の鳴無神社(“加茂の大神”)に座した大神が石を投げ、「この石の落ちた所に我を祀れ」と言われて落ちた所がこの場所だったとされている。

さて、ナウマン博士はドイツへ帰国する1885(明治18)年に二度目の四国訪問を行っているが、その際は舟で土佐湾から高知入りしており、博士の二度にわたる四国の地質調査の結果をまとめた論文:「四国山地の地質」[E. NAUMAN und M. NEUMAYR (1890)]の中で、高知市周辺の地形・地質について、以下のように記述している。

「……汽船(岩崎弥太郎の創設した三菱汽船会社所有)は、物部川の西の、岸近くに位置している丘と山の間隙を目指して進む。狭くて危険な入口を通過すると、舟は山々に囲まれた内湾(浦戸湾)へとわれわれを運び込む。驚くべきものは、この、海の隠れ家のような内湾である。それは山の湖のように静かで、黒い潮をたたえ、岸は急で、森に囲まれている。湾は狭くくびれ、その奥には広い水道があり、その先で間もなく土佐の中心である



[図] 台ヶ森から北方の眺め(中央右よりが高知城)

高知に達する。その先端には鏡川が注ぎ、そこに大きく華やかな首都の家並みが広がっている。

高知の湾(浦戸湾)の入口の北西に、湾を取り巻く山地の最高峰である臺ヶ森<sup>たいがもり</sup>が存在する。ここからは、魅力あふれる美しい眺めを楽しむことができる。特にそのパノラマはあたかも説明図のようで、山地や山脈の形態がよくわかる。眼下には、われわれが今立っている山から、黒い森に覆われた瘤状の山が平野へ向かって延びている。平野(高知平野)の真ん中には大きな町(現高知市)があり、その中心には森に覆われた丘の上に城(高知城)がある。西から東へ広く続く平野の彼方には、山脈の彼方にまた山脈というように山が重なり、希に見る規則正しさをもって高くなっている。山地は北へ階段状に高くなり、最高に注目すべきことには、その山背が直線状につらなっている<sup>4</sup>。平野に接しては土佐山山脈があり、その向こうには黒森山脈<sup>5</sup>はるかにそびえ、そしてその「シュヴァルツヴァルト」<sup>6</sup>の肩の上には、中央地塊の結晶片岩の青い峰が覗いている。」(山下昇訳)

記述文とともに、最初のスケッチ[台ヶ森から北方の眺め][図]が掲載されており、スケッチ内には、高知城、中央左(西)から右(東)へ流れる鏡

川、その支流で左下(南)から上(北)へ流れる鷺尾山を源流とする吉野川、高知市街北方の北山(文中の「土佐山山脈」)、さらにその北側の工石山(Kuromoriと表記されている所で、文中の「黒森山脈」の一角)などが描かれている。

筆者は、随分以前に、このナウマン博士の論文の翻訳者である大学時代の恩師・故 山下昇氏(信州大学名誉教授)の依頼で、論文中に掲載されている9編のスケッチのポイントを確認して回ったことがある。その中で最も感動的でありかつ思い出に残っているのが、今回紹介した冒頭のスケッチ:「台ヶ森から北方の眺め」である。何とそこは、かつて、筆者が子供の頃、遠足、キャンプ、そして、初日の出などでよく登った実家からほど近い「鷺尾山県立自然公園」内の景勝地-鷺尾山-であった。今から110年ほど前、同じ地質学の道を志す著名なあのドイツ人地質学者・ナウマン博士が直にこの場所に立ち、高知市街とその北方を眺めスケッチしたとは全く思いがけないことであった。残念ながら、現在は、植林が成長して視界を遮り北方の市街地の光景は望めないが、10年ほど前、やっとの思いでよじ登った樹木のわずかな隙間から飛び込んできた博士のスケッチとほぼ一致する光景が今でも



[写真] 鷺尾山から見た高知市街

忘れられない。今回写真撮影のため再度この山を訪れ、前回と同じ木によじ登ろうとしたが植林の成長ですでにここも視界が遮られていて、あきらめて山頂付近の別の木〔高さ：約10m〕から撮影することにした。10年余りの歳月の間にも宅地化が進み市街地は急成長し、高速道・高知自動車道が市街地まで延びてきていた。また、以前は気が付かなかったが、遠く北西方向には雪を頂いた石鍾山系ツツジ山系〔筒上山：1889m〕と思われる山並みも観ることができた〔写真〕。

10年前を振りかえり、こんなにも自分の身近な所に博士の足跡があったことにただただ驚きと感動を覚えたことを思い出し、今回その思いを新にした。と同時に、このようなすばらしい“出会い”のチャンスを私に与えてくれた今は亡き恩師に感謝したい。

※1 顕石は地質学上有名な中生代白亜紀の化石植物群〔顕石植物群〕の模式地（標準地）で、ここでナウマン博士は地元の大塚、手嶋両医師の依頼で“石炭”の調査を行っている。また、当地でナウマン博士が和紙に毛筆で墨書したドイツ語詩の掛軸が3本現存している〔佐川地質館〔高知県佐川町：1885年5月4日記〕、大塚家（東京）〕。

※2 新石器時代の巨石建造物の一つで、数個の支石の上に一枚の大きな板石を載せたテーブル形の構造をもつ墳墓遺構を言い、世界的に分布し、特に西ヨーロッパに多い。顕石で調査されたものは、William Gowland（1897）『The Dolmens and Burial Mounds in Japan, Archeologia』、『日本のドルメン葬に高塚、アケオロジヤ誌』の中で紹介されており、フランスやカスピ海の西部に普遍に見られるものとされているが、古墳時代の「横穴式石室墳」のことである。

※3 山下（1996）では、『鳥帽子山（359.6m）』のことを指すであろうとなっているが、筆者の調査で、鳥帽子山ではなく、明らかにその東のピークの繁尾山（306m）であることがわかった。ちなみに、ここはかつて中世の山城や太平洋戦争中に監視所があった所で、高知市街はもちろん浦戸湾、太平洋を一望できる大変眺望のいいことで知られていた。現在でも元旦には太平洋の水平線から昇る初日の出の見物客で賑わう。

※4 標高300～400mの山頂がなだらかではば同じ高さの等高性をもつ〔隆起準平原〕で、第四紀〔180万年〕以降の大規模な隆起とその後の侵食作用によって形成された地形。

※5 ドイツ南西部のライン河の東にある山地：Schwalmwaldを翻し、schwalz：「黒い」、Wald：「森」から「黒森」と訳されることがある。

〔引用文献〕

山下 昇（1996）：日本地質の探求—ナウマン論文集—、東海大学出版会。

〔註〕引用文中の（ ）内の注釈は筆者によるもので、翻訳の原文中にはない。

（やすい としお／横倉山自然の森博物館副館長兼学芸員）

＜お知らせ＞

写真展：「仁淀川の風物」

〔平成16年3月19日（土）～4月10日（日）〕

平成16年夏の企画展：「仁淀川の自然」の一環として行われた「仁淀川フォトコンテスト」の応募作品〔約40点〕を展示した写真展を開催します。

## 自然のままに

齋藤 政広

山を歩くと、自然そのものという場所と、人為的につくられた自然とがある。今、自然そのものが残っているのは、人が踏み入れることのできない岩場くらいである。ほとんどが人為的に手の入れられたものばかりで、「自然がいっぱい残っている」と、よく使われる表現は何を指しているのかと思うことがある。手入れのよく行き届いた植林を見て、又は広葉樹の多い雑木林を見て、谷川や河川を見て、と思いはそれぞれであろう。ただ、緑の多さをそう表現するのかもしれない。しかし、同じ自然でも、生物の営みがあり、食物連鎖がよくできるところ、昆虫から野鳥、動物まで生活することのできる環境の整ったところを自然が残っていると言うのだろう。

横倉山の南面はそういういろんな自然環境を体験できる。岩場が多くて人の手が入らない地域、一度は木炭生産等で手は入れたがその後そのままになり雑木林となっている地域、植林されているが手入れのされていない地域、間伐等の行き届いた地域と混在している。

まず、岩場が多いところや雑木林に入ると、動物の生活の跡がすぐに見つかる。いたる所に獣道があり、食痕、糞がある。雑木林には数知れない様々な木が育ち、蔓が巻きつき、木々には多くの実がなり野鳥が糞り、猪の土を掘り返した跡、大きな木に体を擦り付けた跡、葛の根を食べた跡、狸の糞塚、野ウサギの糞、最近になってクマタカの食痕と思われる小鳥の羽が散乱しているところ等々。当時の生活道は木炭を担いで通っていたとは思えないような道で、当時の生活の大変さを垣間見ることができる。

横倉山の特に「馬鹿だめし」から上流に至る谷間は、このようにめったに人の入ることのない場所で、動植物もある程度保存された状態になっている。また、横倉山の南尾根周辺も同様である。このような自然のある場所は本当に少なくなっており、大変貴重な存在だと思う。

少し傾斜の緩い所や岩場のない所は植林が多いが、人家から遠い所ほど手入れがされていない。林に入ると昼でも薄暗く、地面には草も生えてい

ない。“森林砂漠”といわれるように土がむき出しになり、雨が降れば表面を流れていく。その水が集まって大きな水路のような水の道を作る。道も崩れ果てた状態になっている。動物たちの生活の跡も見えない。

間伐や枝打ち等をして手入れの行き届いた植林は、ほどよく日光も入り、地面には小低木や草が生い茂り、木も勢いよく見える。植林とはこういうものだという感じがする。残念ながら、このような手入れのされた植林は大変少ない。

人の手で作り変えられた自然、役に立つものはそれでよいが、見放された植林はなんとかしないと自然そのものを壊してしまう。荒廃が進み、自然災害も起こす。

よく、‘自然がいっぱい’という表現を使う。越知町は自然がいっぱいでとか、自然豊かで、とか言うが、果たしてそうだろうか。荒れ果てた植林、耕作されない田畑、荒廃した河川など、



決して自然が豊かとは言えないのではないか。日本は外国から木材を輸入することによって外国の山を荒廃させ、日本の木材は使われなくなって日本の山も荒廃した、ということになっている。不思議なことだと思う。

今、自分たちにできることを考えて、実行する時期に来ていると思う。これ以上子孫に悪影響を及ぼさないためにも。

(さいとう まさひろ／横倉山自然の森博物館館長)

## 夏のをたより

**【横倉山自然の森整備事業－自然の森“道しるべ”づくり－】**  
2004年7月18日(日)〔参加者：大人15名(講師1)〕(社)国土緑化推進機構公募事業)

横倉山の遊歩道沿いにある史跡や休憩所のポイントを示す案内標識のうち、古くなったものを立て替えたり、新たに設置するなど、登山客への“道しるべ”とする。

例年のない猛暑の中、会員たちは汗だくになりながらボランティアで作業を行った。



**【初秋の横倉山観察会】**

2004年9月11日(土)〔参加者：28名(講師1)〕

横倉山を散策し、この時期ならではの横倉山を代表する植物(コオロギラン等)を観察することを目的とする。今回は、植物観察以外に、度重なる今年の台風襲来の突風によりあちこちで自然の猛威の前に無残にも倒れた遊

歩道沿いの倒木の後片付けにも負われることになった。

**【木の根を守ろう！－山のダムづくり－】**

2004年10月23日(土)〔参加者：大人15名(講師1)〕(社)高知県森と緑の会・緑の募金事業)

横倉山の「横倉宮」(祭神：安徳天皇)鳥居前にあるアカガシの巨木から網の目のように張り出した根を登山客の靴底の摩擦による損傷を防ぐために行った。

木の丸太で土留めの堰(“ダム”)を造り、そこに土とウッドチップを敷き詰める方法を探った。植物研究家の参加もあり、植物の学習も同時に行いながらの充実した有意義な作業であった。

**【瑞穂ハンザケ自然館視察研修】**

2004年11月6・7日(土・日)〔参加者：大人21名(内事務局3)、小人1名〕

越知町内では、時折体長1mを越す「国の特別天然記念物」であるオオサンショウウオ(“生きた化石”)が見つかり、四国では最も採捕例が多い地域となっている。オオサンショウウオについてもっと詳しい生態、生息環境などを学習する目的で今回の視察研修を計画した。途中、車内でオオサンショウウオに関するQ&Aなどで事前学習を行い予備知識を貯えながら目的地に向かった。

初日の目的地である「瑞穂ハンザケ自然館」(鳥根県邑南町)は、町の貴重な財産であるオオサンショウウオ(“ハンザケ”)を通して、地元の自然を体験・学習し、“再発見”することを目的として設立されたエコミュージアム施設



で、地域の自然・歴史・文化などを探求し、“未来を創造する”ための構想から生まれた博物館である。

館内には、水槽で飼育されるオオサンショウウオやその骨格が展示され、しくみや生態がわかるようになっている。館の近くには「ハンザケ観察舎」(写真)があり、小川に棲む生きた自然のままの姿も観察でき、生息環境が同時に理解できる“野外博物館”となっている。

邑南町では、オオサンショウウオを守るために、下水道整備、河川工事の事前調査(巣穴の調査など)、廃油を使った石鹸の使用などのいろいろな活動がなされており、人と生き物との共存の精神が感じられた。

2日目は、西日本最大の規模を誇る水族館・「しまね海洋館 アクアス」を視察した。

## 【クリスマス リース教室】

2004年12月18日(日)〔参加者:27名(内事務局3、講師2)〕  
毎年恒例で人気の高い行事であるが、今回は材料を例年のモミ・ヒカゲノカズラなどの緑の葉を使用せず、代わりに松かさ・スズカケノキ・モミジバフウなどの種果を

主体としたシックなリース作りに挑戦した。材料の種類が多かったせいか出来上がってみると意外と豪華だった。これだと、10年は長持ちするという。

## 写真展:【昔懐かしい越知町の写真展】

2005年1月3日(月)~1月30日(日)  
主として正月休みに帰省する町外に在住の越知町出身者のために企画。

越知町がまだ蕨糸が盛んだった明治30年頃の越知町市街地の写真を始めとする写真35点とアルバムを展示。3日(月)は本来休館日であるが、特別開館・入館料無料とし、正月早々多くの来館者が訪れた。今後も、地方の博物館として、地元の歴史を語る資料を大切にしていきたい。

## 牧野植物園の化石標本:【平田コレクション】の

### 一部を仮収蔵

この度、[財]高知県立牧野植物園が所蔵する故・平田茂留氏によって採集された約1万5000点の化石標本のうち、主として高知県内の中・古生代の化石約9,000点〔横倉山のシルル紀の三葉虫を始めとするタイプ標本23点を含む〕が当館に仮収蔵されました。“標本の有効活用”を目的とするための措置で、より多くの人に利用して頂きたいと思っております。

利用を希望される方は、身分を証明するものを持参の上、お越しください

## 博物館ニュース

### 【夏休み博物館教室】

【植物】講師:恒石直和(高知市子ども科学図書館指導員)  
〔参加者:小人14名、大人12名(内事務局3)〕

最初に、博物館3階展望ロビーで、顕微鏡によるツクサの気孔の観察、輪切りにしたダイコンを用いた電子メロディーを流す“くだもの電池”の作成など植物のしくみや意外性について楽しく学習する。

次に、博物館の周りの植物についていろいろ学習したり、植物を使っただけの遊び道具の作製を行う。ひ弱だった牧野富太郎博士が幼少時代に毎日煎って食べたコウモリガの幼虫の棲みつく「クサギ」の観察や、シイの葉を使っただけの「草笛」、カラムシを使っただけの「鼓」、カヤの葉を使っただけの「矢」の作製などを行う。

植物が人間の衣食住いろいろな所に利用されていること、身近な植物を使っただけいろいろな遊びができることなど、実に盛りだくさんの内容で、楽しく学習することができた。  
【昆虫】講師:石川妙子(水生昆虫研究家)〔参加者:小人

13名、大人11名(内事務局3)〕

今年は、仁淀川の支流・坂折川の水生昆虫について学習することにした。

坂折川は、横倉山の南麓を流れる清流で、時折体長1m以上のオオサンショウウオが見つかる川として知られる。

当日は、数日前の台風の通過に伴う大雨の後の増水で心配されたが、予想以上に水生昆虫が採集・観察できた。

採集した水生昆虫は、水生昆虫観察用に改良されたトラック・「ECOまなぶ号」〔高知県所有〕に搭載された拡大鏡とモニターを通して観察し、それぞれの特徴について学習する。カワゲラ、ナガレトビケラ、ヒラタカゲロウ、サワガニなどの「きれいな水」の指標となる水生生物が採集され、坂折川が最下流部においても水質が「きれいな」ことを示していた。

親子で川に親しみ、仁淀川の水質の高さを水生昆虫を通じて知ることができた。

【化石】講師:近藤康生(高知大学理学部教授)、助手:安



植物教室



昆虫教室



化石教室

井敏夫(横倉山自然の森博物館学芸員)〔参加者:小人16名、大人14名(内事務局3)〕

今回は、地質学における地層の標準地である佐川町川内ヶ谷において、中生代三畳紀の代表的な示準化石である「モノチス」(“龍貝”:ホタテガイの先祖型〔約2億1000万年前〕)の採集を行う。

以前は化石も豊富だった佐川盆地周辺も、最近ではまとまって採集できる化石の産地がほとんどなくなってしまい、今回は仁淀川森林組合佐川事業所の資材置場の一角にモノチスの化石の密集する地層があり、それをユンボで掘り返してもらっての採集会となった。

ハンマーで割った岩石の割口にくっきりと現れた化石に、2億年前の生活の様子が想像され、E. ナウマン博士の墨書によるドイツ語詩の一節「緑なす山々… 大海の中に安らい 奇しき動物の 海底に沈めるもの 再び輝かしき日の光のもとに 持ち出され……」が思い出された。

今回採集した化石を、一夏の思い出として、また、数少ない貴重な資料としていつまでも大切に保存していて欲しいと願いつつ現地を後にした。

#### 【企画展】

〔仁淀川の自然〕:平成16年7月24日(土)~9月5日(日)

清流・仁淀川の秘めるさまざまな魅力を紹介し、それによって自分たちの住む地域に誇りを持つことへの喚起に繋がることを願い、同時に自然環境についても考え、仁淀川の清流と流域の自然、そして、それらによって育まれてきた地域の文化を後世に継承するための環境保護活動に少しでも役立てればという願いで開催した。

主な展示は、

- ・桂浜の“五色の石”で代表される色とりどりの石
- ・アスを始めとする95種類にも及ぶ魚類と水生昆虫〔一部水槽飼育〕
- ・“清流のパロメーター”オオサンショウウオ
- ・牧野富太郎博士の発見・命名によるキシツツジと博士によって日本で最初に命名されたヤマトグサ
- ・高知県の県鳥・ヤイロチョウ〔県指定天然記念物〕、クマタカ
- ・今なお人々の生活道として使用されている大小計14の「沈下橋」
- ・昔の人々の苦勞や生活の跡が偲ばれる「棚田」

このような、仁淀川とその流域に見られる自然と風物を題材に、実物と写真でその魅力をもれなく紹介した。資料の中には、館の職員が作製した本物そっくりのオオサンショウウオの模型もあった。また、期間中、石彫作家・生野宏宜氏による実演も行った。中でも、河原を埋め尽くす色とりどりの石を粉末にした天然の「岩絵の具」で描く絵画の描写体験は子どもたちに人気があり、一夏のいい思い出になったのではないだろうか。

〔南海地震〕:平成16年10月2日(土)~10月7日(日)

今世紀中に起こる可能性が高いと言われている巨大地震:「南海地震」。その実体を知り、発生に備え、被害を



仁淀川の自然展



南海地震展

少しでも少なくできるための手助けになればという思いで企画・開催した。

本企画展では、過去の南海地震の被害状況の写真〔昭和南海地震〕、絵馬〔安政南海地震〕、絵図〔同、幕末絵師:林洞意(“絵金”)筆〕、ビデオの他、地震発生装置、津波発生模型、また、ペットボトルを使った「液状化現象」(噴砂現象・浮き上がり現象)等の体験を通じて南海地震の恐ろしさや発生のメカニズム等について学習してもらい、併せて、木造建築の耐震構造、避難心得、避難用品(“非常用持ち出し袋”)等も紹介し、地震への備えとした。

過去における地震の記録からその性格・規模・予測される災害等を事前に充分把握し、家屋の耐震補強、避難場所の確保と避難訓練等を日頃から実践するなど、防災に対する準備を充分行った上で、来るべき南海地震に備え、被害を最小限に食い止めるよう万全の体制で臨まなければならないし、そのことが私たちにできる最良の“防災”であると言える。

講演:〔南海地震に備えてーその時あなたは どうする?ー〕

平成16年10月11日(月・祝)、越知町民会館において、上記講演会を開催した。講師:岡村 眞(高知大学理学部教授)、参加者:80余名。

南海地震では、太平洋沿岸部の津波による被害が最も大きく、特に太平洋に向かって扇状に開いた地形・湾をもつ高知県では注意を要する。一方、日本で最も平地が少ない本県では山と隣り合わせの人家が多く、山津波の危険性も多い。

「寝室には基本的に何も置かないのが理想」、「地震を災害にするのは自分一日頃の備えと避難訓練を行えば被害を最小限に食い止めることができる」、「向こう三軒両隣一善段の近所付き合いが大事、隣近所仲良くすることが命を助ける」などの教訓を学び、最後に、「寝室は1階と2階のどちらがより安全か?」、「地震予知に対する現状、見通しは?」などの活発な質疑応答が交わされ閉会した。

横倉山ミニ歳時記 ■危うし!! 「ヨコグラノキ」

牧野富太郎博士によって横倉山の“馬鹿試し”の断崖上で明治17(1884)年に発見され、明治34(1898)年に命名された「横倉山タイプ植物」の一つ「ヨコグラノキ」〔くろうめもどき科〕の標準木〔樹齢120年以上〕が、昨年10月の台風23号による強風で、地上から約7メートルの所で、中心の幹とそれから枝分かれしていた枝が3本折れてしまった。28種ある横倉山タイプ植物(内牧野博士によるものは25種)の中で唯一、これをもって博士が命名した唯一の標準木であるとされ、植物研究家の中には保存を訴える声もあった。しかしながら、やはり寿命(“自然の摂理”)に加え諸々の“自然の力”にはかなわなかったようである。幸いにも、横倉山には、この標準木の周辺や遊歩道沿いに合計約60本のヨコグラノキが確認されており、また、横倉山の南斜面にはその特徴ある黄葉からそれと思われるものが点在しており、ゆくゆくはそれらに二代目として歴史を受け継いでいって欲しいと願っている。



【博物館友の会「フォレストクラブ」の平成16年度の活動】

- 4月29日(木・祝) 工石山の自然観察(アケボノツツジ・サンショウウオ)
- 5月16日(日) 友の会運営委員会
- 5月23日(日) 横倉山野鳥観察会
- 5月30日(日) 友の会総会
- 6月19日(土) ヒメボタル観察会(横倉山杉原神社)
- 7月11日(日) 天体教室 一星の金星観察一
- 7月18日(日) 横倉山自然の森整備事業 一遊歩道の標識設置等一〔(社)国土緑化推進機構 緑の募金公募事業〕
- 7月24日(土) ムササビ観察会〔山小屋キャンプ〕(横倉山杉原神社)
- 9月11日(土) 横倉山植物観察(コロロギラン)
- 10月23日(土) 木の根を守る 一山のダムづくり一 〔(社)高知県森と緑の会・緑の募金事業〕
- 11月6日(土)、7日(日) 鳥取県「瑞穂ハンザケ(オオサンショウウオ)資料館」視察研修会
- 12月19日(日) クリスマスリース教室
- 2005年1月1日(土) 横倉山初日の出〔林道凍結のため途中で中止〕

【平成16年度博物館行事】

- 3月27日(土) 第6回博物館協議会
- 4月24日(土)～5月23日(日) 企画展(共催)：「西村洋一水彩画展一風がはこぶもの一」
- 7月24日(土)～9月5日(日) 企画展：「仁淀川の自然」〔協力：NPO法人 仁淀川お宝探偵団〕
- 8月7日(土) 夏休み博物館教室(植物)
- 8月8日(日) 夏休み博物館教室(昆虫)
- 8月22日(日) 夏休み博物館教室(化石)
- 10月2日(土)～11月7日(日) 企画展：「南海地震」
- 10月11日(月・祝) 講演：「来るべき南海地震に備えて一その時あなたは どうする?」
- 12月1日(木) 第7回博物館協議会
- 2005年1月29日(土) 第8回博物館協議会
- 2月12日(土) 第9回博物館協議会

スタッフの声、声、声

【斎藤】博物館へ来てまもなく2年となりますが、自然との付き合いはとても興味深く楽しいものです。昨年は、大きな台風が何度も襲来し、横倉山の樹木もたくさん倒れ、自然の脅威を感じた年でした。そのあとの道をふさいでいた倒木の片付けには、大勢の方々のご協力をいただき、ありがとうございました。この3月で博物館の仕事とはお別れとなりますが、自然との付き合い、横倉山とのかかわりはこれからも持ち続けたいと思っています。この間、博物館の各種行事や博物館友の会の活動にご協力をいただきました多くの方々に厚くお礼を申し上げます。2年間ありがとうございました。

【小田】横倉山の森に足を踏み入れてください。そして、五感を研ぎ澄ましてください。古来より人々は、山や川、大地など自然界より恵を得るだけでなく、そこには神々が住まわれるとして、畏敬の念を持ち、共存してきました。私たち現代人が忘れてしまったものに、その自然界との向き合い方があると思います。横倉山の森に足を踏み入れてください。何かを感じる事ができると思います。

【安井】2004年は正に異常気象の年であった。過去最多の新記録となる台風の襲来とそれに伴う豪雨・浸水、新潟県中越地震……等々。自然の猛威・恐ろしさをまざまざと見せ付けられた。自然は時には容赦なく罪なき人間の命をも奪ってしまう。反面、人間の傷ついた、疲れた心を癒してくれるのも自然。やはり、

人間は自然と共生して生きていかなければならないのだろうか……。これまでもずっとそうであったように。

【小松】山歩きの際は、竹の杖をいつもお供にしています。節間が布袋様の腹のようにふくらんでいるホテイシクの杖(館長の手作り)とは1年半くらいの付き合いですが、そのお腹がしっくり馴染んでいます。春の山歩きのシーズンに入ります。しっかりと懐を支えてください。

【黒原】1月の初め、早朝に仁淀川と地元の風景の写真を撮りに行きました。この日は元々、朝から撮影に出かける予定だったのですが、起きてみれば外は雪。予想外の事でしたが?無事に私お気に入りの写真ポイントで、日の出と雪の仁淀川を含む風景の写真を撮ることができました。雪の中、仁淀川を挟む山の向こうから徐々に夜が明けていく様子は予想以上の美しさで、とても感動しました。

【伊藤】今年の2月1日にいきなり寒波がやってきて、博物館も真っ白になりました。池に張った氷の上にも雪が積もり、図書室から見るとまるで建物が雪の中に埋まっているかのような不思議な光景で、とてもきれいでした。

【福岡】私の実家の鉢植えの紅梅が、2月1日の大雪ですっぴり雪におおわれ、紅と白のコントラストがとても綺麗でした。博物館に来てみると、建物もすっぴり雪化粧をし、一面銀世界でした。こんな大雪は数年ぶりのことです。

高知県高知市立

横倉山 自然の森博物館

〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知内737番地12  
TEL.0889(26)1060 FAX.0889(26)0620

- 開館時間：午前9時より午後5時まで  
最終入館は午後4時30分
- 休館日：毎週月曜日(祝日の場合は翌日)  
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料：大人……………500円  
高校・大学生……………400円 (※各20名以上の団体は100円引替)
- 小・中学生……………200円
- 越知への交通  
高知——(バス約40分)——佐川——(バス約15分)——越知

